

令和七年度

秋季垣生中俳句会 入賞作品

金賞

雨上がり地に香をこぼす金木犀

三年

秋といえば金木犀。そう思えるほどに代表的な秋の植物のうちのひとつです。鮮やかなオレンジ色の花をたくさんつけますが、印象的なのはその香りです。金木犀ならではの香りが漂うと秋の訪れを感じさせます。花は桜のようににはかないもので、雨風の影響をよく受けます。咲いている『美』だけでなく、その花が地面に落ちた後も金木犀の妙味は感じられます。雨上がりの湿気を感じる空気の中に、金木犀のいい香りが木の上からではなく地面から香っているという場面を切り取ったところが見事です。花が地面に散り敷かれた後も楽しむことができることを気付かせてくれる一句です。



銀賞

栗ご飯ほくりほくりと母の味

二年

「実りの秋」の言葉のごとく、日本には、秋に収穫を迎える食材が多くあります。その中でも作者にとって「栗ご飯」は「母の味」とあるので、毎年楽しみしている定番の秋の味覚なのでしょう。擬態語「ほくりほくり」の言葉選びが巧妙で、「栗ご飯」のほくほくとした食感や甘い香り、それをゆつくりと味わっている情景をも思わせます。母と子のほっこりとした愛情を感じる一句です。五感で感じた描写の工夫で、情景が鮮やかに表現できる所も俳句のおもしろさですね。

く栗飯の給仕して居る娘哉 正岡子規く
病床で母と妹の看病を受けていた子規も、栗飯をよく
食していたそうです。



銀賞

秋の風ラインがゆるむエギング中

二年

今出ヶ浜に隣接する垣生地域では、休日になると釣り竿をもつて海へと向かう少年たちをよく見かけます。作者ももれなく釣り好きの一人です。「エギング」のイカ釣りでは、「ラインがゆるむ」時には、アタリ時やエギの着底時などがあるとか。句中の「ゆるむ」を前者と詠めば、「秋の風」が釣り糸を揺らしたかのようにその瞬間が訪れたのでしょうか。イカと作者との駆け引きが「エギング」の醍醐味。「秋の風」と釣り糸の「ライン」の取り合わせが効果的で、青く澄んだ海と緊張の中で釣りを楽しむ、臨場感あふれる句となりました。



銅賞

林檎むくパイ生地編みこむあと二分

三年

「食欲の秋」という言葉がありますが、林檎をただ食べた時の感想でないとところに詠み手の工夫が見られます。オーブンの中を覗き込むと、ゆっくり膨らんでくるパイ生地。『あと二分』という体言止めからは、まだかまだかと完成を待ちわびている様子がよく伝わってきます。

銅賞

悲しき日そつとよりそう赤蜻蛉

二年

秋の物悲しい日にひとりでいたい。そんな時に一匹の赤蜻蛉が飛んできました。赤蜻蛉は何かを語るわけではありません。赤蜻蛉がそつとよりそうと表現しているところに表現力の豊かさが見て取れます。

銅賞

焼きいもやばあちゃんみたいにあったかい
一年

焼き芋のおいしい季節になりました。焼き芋のあたたかさを「ばあちゃんのあたたかさ」に例えている点がとても良いです。焼き芋のあたたかさも「ばあちゃんのあたたかさ」もわかりやすく伝わってきます。

入選

運動会風に負けない声と旗	一年
秋の夜こそりと食べるさつまいも	一年
楽譜追う皆で奏でた文化祭	一年
ふと香ると友との思い出金木犀	一年
夕焼けに響く楽器のチューニング	一年
落ち葉踏む音の和らぐ古道かな	一年
青蜜柑ほおばる親子同じ顔	一年
赤とんぼ風と一緒に舞い上がる	一年
誘われてほんのり香る秋探し	二年
アラームで肌寒ながら脱ぐふとん	二年
鰯雲なんだかわからん気分だな	二年
赤トンボ目線にあたるは夕日のみ	二年
青蜜柑一つ食べれば心晴れ	二年
青蜜柑反応うかがう弟の	三年
秋の風シャーペン走る願い乗せ	三年
秋祭よいさよいとさけぶ夜	三年
薫る花凜と咲きおり金木犀	三年
銀杏散る足もとみればこがねの色	三年